

# 検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2010年9月14日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合) [No.149]

## 革マル派の労組への浸透手法「のりこえの論理」に警戒しよう！

前号では、革マル派の労働組合への浸透の手口について、「治安フォーラム」平成22年6月号「『善良な市民』の仮面で革命勢力としての真の姿を隠して活動する革マル派」(松尾学著)を引用して検証を行った。当該記事には革マル派の「のりこえの論理」について、さらに詳しく記載しているので引き続き紹介したい。

### 3 仮面を剥ぐ (2) 「のりこえの論理」

次に、革マル派の介入を受けている、または受けるおそれのある労働組合についてである。「のりこえの論理」で説明したように、革マル派のオルグは、批判対象があって初めて効率的に行うことができる。その最大の対象は、労組である。同派は、「既成の労組は労働者の味方ではなく、体制に翼賛的に組み込まれている」などと批判することで、一定の労働者の「共感」を得ることを画策してきた。特に、民主党政権になってからは、こうした主張を強め、「労働者連帯ネットワーク」の取組みでは、「連合を始めとする既成労組は、正規労働者の味方であり、御用組合化している」などと主張して厳しく批判し、その一方で、非正規労働者の取り込みを図っている。その一方、同派にとっては、「加入戦術」を用いて労組に潜入する以外にはオルグのすべはない。したがって、労組関係者には、平素から、同派の動向に関心を持って最新の警戒をし、その陰謀をできるだけ早期に探知し、先制的に封じ込め策を講じることが重要である。これを怠ると、労組が、JR東労組の例に見られるように、同派の餌食にされ、乗っ取られてしまうことを肝に銘じてほしいのである。

## 東労組は「人民のための政治」実現へ民主党政権の変革を目論む？

革マル派の批判対象をつくるオルグ手法や、既存の労組を「御用組合」と批判するやり方は、JR総連傘下の少数組合である西労や東海労などの主張とも酷似している。

また、2010年2月10日に開催された東労組第36回中央委員会で吉川書記長は総括答弁で、田城候補を擁立した第22回参議院選挙を「連合を変える闘い」と述べたほか、2009年12月15日の東労組機関紙「緑の風」(495号)コラム「東風」には以下の記載がある。

私たちJR総連・JR東労組は政権交代を実現した国政に、労働者のための社会を実現するため、田城郁氏を来年7月の参議院選挙に組織内候補として擁立することを決定した。この選挙闘争を組織の命運をかけて闘うために、その意義について全組合員の意思統一をお願いしたい。...(中略)... 第二は、「国政の変革」だ。社会を変革するためには、まず国政の変革が必要である。私たちの闘いによって政権交代は実現したが、それは変革のための第一歩を切り拓いたにすぎない。民主党内には「改憲派」やJR連合など「御用組合」と関係を持つ議員もいる。新たな鳩山政権は「国政の変革」と「弱者のための」の政治を約束した。したがって今こそ、労働者の代表を国政に送り、労働者の怒りの風を吹かせたい。そして民主党政権は、労働者の前に立って、労働者と共に労働者・人民のための政治を行うべきである。

JR総連・東労組が組織内議員を国会に送り込んだ目的は「労働者・人民のための政治」を行うために民主党政権を変革することらしい。労組への「加入戦術」や「のりこえの理論」の手口に照らしてみれば、国政への革マル派の浸透に最大限の警戒心を持つべきことは当然であろう。ところで「人民のための政治」との記載も興味深い。普通の組織は「国民」と記載するところだが、彼らは「国民」という言葉がよほど嫌いなようだ。